

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 9 月 16 日現在

機関番号：34420

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K03010

研究課題名（和文）教科内容の深化を図るCLILと小中学生の文構造への気づき

研究課題名（英文）Research on CLIL for exploring the interrelationships between deepening subject specific content and improving noticing language structures among adolescent learners

研究代表者

柏木 賀津子（KASHIWAGI, KAZUKO）

四天王寺大学・教育学部・教授

研究者番号：40549052

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、1)小中学校の他教科と英語の統合において、用法言語基盤モデル（UBM）理論に基づき、ひとまとまりの表現の頻繁なインプットから文構造に気づくことに焦点を当てたCLIL教育法を提案すること、2)学習者がどのように英語の文構造を理解し学びをproductに転移できるかを明らかにすることである。フィンランドやイタリアなどの研究者とCLIL研究学術交流を行いCLIL授業の可能性を探った。CLIL授業を行った処置群では、音声文法性判断テスト、時間制限即興ライティング等に拠って、文構造への気づきや即興的言語使用に有意な差が見られた。この結果からUBMとCLILの親和性を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果としては、用法基盤モデル（UBM）を軸に、小中学校の英語教育と文法指導を関連付け、CLILの指導を行い、教科内容（理科・体育・SDGs等）の思考場面で創造的な英語使用を創り出し英語面での進捗効果を検証した。研究当初には内容の前に文法説明が重視される傾向があったが、2018～2020年頃の本研究結果は広く参照され、日本の思春期時期の学習者もひとまとまりの表現から文構造に気づき、教科内容を絡めることで思考が深まり、このプロセスは英語の運用面に転移可能であることが分かった。また、CLILを活用したフィンランド海外教育実習・国際学会開催を行い国内外で延べ400人の研究者らの参加を得た。

研究成果の概要（英文）：The purposes of this research are: 1) to propose a CLIL pedagogy for teaching English at the elementary and junior high school levels, focusing on students recognizing sentence structure through listening and speaking; and 2) to clarify how learners can understand English sentence structure and apply it to various activities in CLIL. We achieved that the principal investigators engaged in academic exchanges with researchers from Finland, Italy, and other countries to explore the possibilities of CLIL classes in an EFL. In the classroom, we examined how learners' noticing of sentence structure and their improvisational use of language transform through an auditory grammaticality test, time-limited improvisational writing, and the analysis of learners' discourse. Additionally, the relationship between the usage-based model (UBM) and CLIL was explored with the international collaboration with Austrian researchers.

研究分野：第2言語習得研究 用法基盤モデル CLIL クロスカリキュラム フィンランドのバイリンガル教育

キーワード：CLIL クロスカリキュラム Focus on Form 用法基盤モデル（UBM） 21世紀型スキル フィンランドの教育 内容と言語 スキャフォールディング

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19, F - 19 - 1 (共通)

研究報告書：基盤研究(C)「教科内容の深化を図るCLIL と小中学生の文構造への気づき」

代表研究者：柏木賀津子(四天王寺大学)

共同研究者：宍戸隆之(東北学院大学) 種村雅子(大阪教育大学)

1 研究開始当初の背景

本研究を開始した2017年頃は、CLIL(内容言語統合型学習)に関する関心が高まりつつあったが、特に英語とクロスカリキュラムについての言及は学習指導要領でもまだ見られず、2022年実施となった新学習指導要領において、異分野の統合による思考・判断・表現力が初めて注目され、高校分野においてはCLILの指導方法が特に具体的な指導法として注目されるようになった。小学校では元来、複数教科を担当する教員が英語を担当すること、中学校ではカリキュラムマネジメントが重視される中、CLILの指導法をいち早く学ぼうとする研究者や教員らが、指導法とその効果を探索しようとしていた。研究者らは、2012年頃から、理科・体育・環境などについてCLILの理論を紹介しそれに基づく授業創りを行い、フィンランド海外教育実習を8年間実施してきた。内容の豊かな他教科のコンテンツと指導法を開発してきたことを生かして、2017年ごろから代表者らが主となってワークショップを開催したり、海外のCLIL研究者を招聘したりした。日本では4か所(北海道・宇都宮・東京・京都)でのワークショップを開いたが、いずれも盛況であった。その一方で、CLIL指導で学ぶ小中学生が教科等の内容を深め考える場面で、英語の構文にどのように気づき、文構造を学び、自らのProduct(発話)に移すのか、どのようにして創造的な英語使用を創り出すのかという言語面の進捗については実証データがなく、本研究はその点を明らかにしようとするものであった。

2 研究の目的

UBM(用法基盤モデル)に基づいて、小中学校の英語教育と文法指導を関連付け、CLIL(内容言語統合型学習)の指導を行い、教科内容(理科・体育・環境教育・SDGs・英文学や言語教育)が深まる思考場面での文構造の理解と創造的な英語使用が見られるのかどうか、言語面での進捗効果を検証する。その上で、効果的なCLIL授業実践を実践し提案する。その成果を広く日本の学校現場に普及すると共に、海外のCLIL研究者との学術交流を行い、英語教育の質的向上に貢献する。

3 研究の方法

まず、CLILの授業方法を先行研究に基づいて明らかにし、思考の深まりについては、Dalton-puffer氏のSeven Cognitive Discourse Functions(7つの認知機能ディスコース)を参照してディスコースにラベリングを行い、言語面ではListeningによる文法性判断テストを実施し、WritingおよびSpeakingによる授業後のディスコースや即興作文の総語数・動詞出現・フレーズ入れ替え頻度・におけるディスコースを抽出し、それらの相互の関連を明らかにしようとした。

4 研究成果

発表した論文の中から分析例をここでは示す(柏木・松田・伊藤・2022)。この論文では、対象者を日本の中学校2年生とし、処置群(CLIL・UBM)・対照群(PPP型授業)の2群比較によって文構造

の理解と産出の様子を分析した。UBM（用法言語基盤モデル）に基づき、CLIL 指導法を組み合わせ、ストーリーテリングを活用した文章再構成タスク（ディクトグロス）を行った。インプットからインテイクが起るように授業をデザインし、同時にストーリープロットに興味を持たせ、言語面では、まだ文法の説明より先だて、受動態をもちいたひとままとりの表現に触れさせ、文構造への気づきを引き出すようにした。結果としては、CLIL と文構造の気づきを引き出した処置群において、Listening ではある程度の差が見られ、即興Writing では、Token-Type 率との関連において、言語複雑性を示すG 値（ギロー値）と、動詞フレーズの産出における入れ替え数の両方に置いて有意に高いという結果が見られた（表1・表2）。このことから、先に文法を説明してその練習を行ってから表現する授業に比べて、CLIL のように内容の豊かなインプットに触れさせ、思考を深まる場面で文構造に頻繁に触れる授業法において、中学校2年生の生徒は、英語の受容面と産出面の両方で効果が高いことが分かった。また、産出した英文にはナラティブで、インプットから借用し部分を入れ替えて言葉を使う傾向が見られた。さらに、処置群では、英語の理解度の生徒間の差が事後には縮小し上方向に傾いた（図1）。これはCLIL におけるアクティブ・ラーニングの実現によって、双方向の協働的言語使用を多いことが影響すると考えられる。

分析の結果から、この方法を活用してCLILの授業によって生徒の英語の学びを活用に繋ぐという転移スキルの育成が期待される。また、ストーリーそのものを吟味し思考する力をつけ、Conceptual Growth(概念的な成長)をも期待される。このことは、英語を教え込まれ暗記を強いられることで英語力を習熟させるClassroom 依存型の会話練習型の学び方よりも、実際のグローバル社会でのCommunity 依存型で問題解決をするような場面での双方向言語使用に近いと考えられ、言語を使ってコミュニティへの貢献を行う21 世紀型の英語力を培えることが期待される。

表1 時間制限即興作文における TTR とギロー値による異なり・フレーズ入れ替え頻度
(FS グループ = CLIL & UBM ; Non-FS グループ = Non-CLIL & PPP)

Timed Essays Using Type-Token Frequencies, Guiraud's Index, and Edge of Proceeding

FS group (N = 63) and non-FS group (N = 71)									
		Pre-Essay				Post-Essay			
		Token	Type	EP	G	Token	Type	EP	G
FS	Mean	17.76	13.68	3.8	3.19	27.83	24.75	3.08	4.55
group	(SD)	-11.32	-8.78	-4.86	-1.23	-13.88	(12,43)	-4.26	-1.27
Non-FS	Mean	12.17	10.28	1.89	2.71	16.42	15.04	1.38	3.4
group	(SD)	-11.27	-8.82	-4.34	-1.28	-12.63	-11.44	-1.9	-1.53

Notes: G: Guiraud Index; EP: Edge of Proceedings (times)

研究の成果とその発信では、検定教科書の執筆、国際研究集会の開催、自治体連携のCLIL研修、アジアへの招待講演などの機会を得てきた。主な著作物としては、CLIL 共著書を4冊発刊した（大修館書店2・明治図書1・くろしお出版1等）。次に、新型コロナウイルス感染症の期間は、オンライン学術交流や教師ネットワーク創りを行った。大阪府下教育委員会、Teacher For Japan などと連携し協働的問題解決力の

育成や、21 世紀型スキルの育成を行い「教員の 21 世紀型スキル尺度 (Edu21st) 」を作成した論文が査読付き論文として採択された (柏木・宍戸・矢田, 2021)。Edu21st では、CLIL を取り入れた英語プロジェクトなどにおける生徒の自己効力感の高揚を観察する有効なツールとして活用されている。

表 2 ギロー値とフレーズ入れ替えの比較

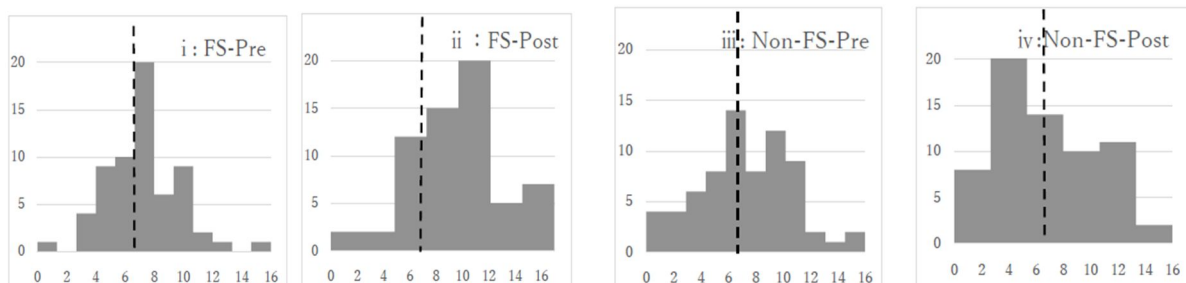
Source	Guiraud's Index					Edge of Proceedings				
	df	F	p		partial η^2	df	F	p		partial η^2
Groups	1	14.98	0	**	0.102	1	6.57	0.011	*	0.047
Error	132	-21.24			0.1	132	-21.24	0.01	*	0.1
Time (pre/post)	1	119.21	0	**	0.48	1	0.417	0.52	n.s	0.003
Groups×Time	1	13.03	0	**	0.09	1	0.417	0.52	n.s	0.003
Error	132	-0.59				132	-10.29			

Notes: * $p < .05$, ** $p < .01$, partial η^2 : effect size

図 1 2 群の事前と事後の変化比較

(FS グループ = CLIL & UBM ; Non-FS グループ = Non-CLIL & PPP)

A shift from the pre-test to the post-test for FS and Non-FS group



また、クロスカリキュラムでは、理数CLIL (紙飛行機の揚力や慣性の法則活用)、体育CLIL (英語と球技、脳と運動機能に関連して)、SDGs・環境CLIL 等について授業ビデオをホームページで公開した。研究代表者はまた、新学習指導要領に基づく教科書編集に関り、SDGs の内容を開発し教科書執筆として掲載された (環境、水の大切さ、Food Waste 等)。主な社会への成果還元としては、7 点が挙げられる。1) 4 年間に渡り、国内外のCLIL 実践者との国際シンポジウムや、フィンランド・イタリアの教育機関へのCLIL 訪問授業を実施した。2) 2021 年には、イタリア文部科学省の研修トレーナーのSilvana Rampone 氏 (ピネロロ市教育委員会) を招聘し、EU のe-Twinning サイトとCLIL 教材共有について講演を開催した (参加80名)。3) 2021 年にはユヴァスキュラ大学のJosephine Moate 氏、フィンランド国立教育研究所、矢田匠氏、イースタン大学、矢田秋恵氏を招聘し、CLIL 授業と学習者Agency 育成について議論した (参加90名オンライン)。オーストリアのCLIL 研究者のChristiane

Dalton-puffer 氏（ウィーン大学）、およびTarja Nikula 氏（ユヴァスキュラ大学）を招聘し、教科特有の言語について研修を深めた（それぞれ参加90名）。4）2017年には、香港の教育学会で体育CLILの実践発表を行い優秀論文学会賞が授与された。5）2023年には、台湾文部科学省の開催するバイリンガル教育成果発表への招待講演を行った（参加200名）。6）フィンランドのセイナヨウキ市教育委員会との連携でCLIL 学術交流研究会を行った。7）ベトナムのハノイで日越大学における俳句とCLIL について招待講演を行い日本とベトナムの学術交流を行ったこと等である（参加200名）。科研最終年度（2023年）には、ユヴァスキュラ大学のCLIL 研究者らとTeacher Agency の高揚を図る国際学術交流セミナーを開催、2021年に出版した論文で示した「教員21世紀型スキル尺度（Edu21st）」（柏木・宍戸・矢田, 2021）について学会で配信し、その後も多数の文献引用があり、教員養成および海外研修において参加者の事前事後の変容を見取る有用なツールとして活用している。

引用文献

Kashiwagi, K., Matsuda, S., & Ito, Y. (2022). How does a usage-based approach cultivate procedural knowledge of the morphological structure(-ed): Using dictogloss tasks. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 33, 159-174

柏木賀津子・宍戸隆之・矢田匠（2021）。「教員21世紀型スキルの自己効力感尺度の検討 学校教育でグローバル・コンピテンスを培うためにー」『人間環境学研究』19(2). 91-98.

柏木賀津子 Research Map 参照 <https://researchmap.jp/read0145281>（その他の論文・著書）

柏木賀津子 研究ホームページ 参照 <https://www.kashiwagi-lab.com/https://www.kashiwagi-lab.com/clil-movie-%E5%B0%8F-%E4%B8%AD%E5%AD%A6%E6%A0%A1/>（CLIL 授業動画）

2023年：最終年度の招待講演・学会発表

柏木賀津子（2023）「Assessing CLIL Implemented in a Multidisciplinary Approach: Focusing on Teachers'21st Century Skills 日本のCLIL 教員研修とその評価」台湾文部科学省 台湾バイリンガル教育研究中心総合成果展 基調講演（国立台中教育大学）2023年6月10日記述言語英語会議種別口頭発表（招待講演）

柏木賀津子（2023）「俳句を世界へーCLIL と複言語・複文化の融合ー」CLIL-ITE Workshop at University of Vienna オーストリア国ウィーン大学 CLIL-ITE ワークショップ（招待講演）

柏木賀津子・小柴和香（2024）「Overseas Teaching Practice Incorporating CLIL and Multicultural Perspectives: Utilizing a Scale of the 21st Century Skills for Global Teachers」RELC シンガポール国際言語教育学会

柏木賀津子（2023.）「Exploring the relationship Teacher Agency and the adoption of CLIL in workplace : Towards CLIL practice on "Global Issue /The 6th J-CLIL Annual Bilingual Conference-Plenary Talk 日本CLIL 教育学会基調講演 早稲田大学（招待講演）

柏木賀津子（2023）「CLIL の授業方法の提案」全国英語教育学会（JASELE）第48回香川研究大会 ワークショップ講演（招待講演）

池田勝久・柏木賀津子・工藤泰三・和田玲（2023）「CLIL 再考：What is it? Why is it important? 学習指導要領・共通テストとの関連は？」JACET 教育問題言語教育エクスポ（シンポジウム）中央大学

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 13件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 Hazuki NAKATA Kazuko KASHIWAGI	4. 巻 1
2. 論文標題 Getting to Know Animal Habitats in CLIL 2 Pre-primary Education	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Springer Nature Switzerland AG 2023, A. Otto, B. Cortina-Perez (eds.), Handbook of CLIL in Pre-primary Education, Springer International Handbooks of Education	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-031-04768-8_34	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 柏木賀津子 松田静香 伊藤由紀子	4. 巻 33
2. 論文標題 How does a usage-based approach cultivate procedural knowledge of the morphological structure (-ed): Using dictogloss tasks	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan	6. 最初と最後の頁 159-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 柏木賀津子 宍戸隆之 矢田匠	4. 巻 4
2. 論文標題 教員21世紀型スキルに資するグローバル教育研修に関する実践的研究—Edu21st尺度による自己効力感の変容に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校改善研究	6. 最初と最後の頁 62-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 柏木賀津子 宍戸隆之 矢田匠	4. 巻 19(2)
2. 論文標題 教員21世紀型スキルの自己効力感尺度の検討 学校教育でグローバル・コンピテンスを培うために—	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間環境学研究	6. 最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柏木賀津子 山下佳世子 鈴木渉 北野ゆき 中田葉月	4. 巻 19
2. 論文標題 エビデンスベーストの英語の読み書きー小学校外国語科を支える10回パッケージ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小学校英語教育学会紀要 JES Journal	6. 最初と最後の頁 184-199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柏木賀津子	4. 巻 IBS研究所WEB
2. 論文標題 教え方と学び方が変わるCLIL授業ー日本の良さを活かして次世代の人材を育てる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 パイリンガルサイエンス研究所 英語教育研究コラム	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柏木賀津子	4. 巻 68
2. 論文標題 小学校で行うCLILの深い学び: 思考と文構造の両面から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大修館書店『英語教育』	6. 最初と最後の頁 52-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 穴戸隆之	4. 巻 69-3
2. 論文標題 身体情報の可視化で持久走の授業はどう変わる?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 38-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柏木賀津子	4. 巻 68-11
2. 論文標題 小学校で行うCLIL授業実践(4)理科との連携:昆虫のすみか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大修館『英語教育』	6. 最初と最後の頁 52-53
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柏木賀津子	4. 巻 68-13
2. 論文標題 小学校で行うCLIL授業実践(6)思考と文構造の両面から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大修館『英語教育』	6. 最初と最後の頁 52-53
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takayuki SHISHIDO, Kazuko KASHIWAGI	4. 巻 2
2. 論文標題 A reflective practice for improving teacher students' abilities in conducting CLIL in physical education classroom in an overseas teaching project	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 香港教育学会優秀賞 プロシーディングス	6. 最初と最後の頁 92-109
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柏木賀津子	4. 巻 1
2. 論文標題 他教科と関連させた小学校英語	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小学校英語教育学会JES20年記念誌	6. 最初と最後の頁 84-89
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柏木賀津子	4. 巻 1
2. 論文標題 Early Adolescent Learners' Noticing of Language Structures Through the Accumulation of Formulaic Sequences: Focusing on Increasing the Procedural Knowledge of Verb Phrases	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都大学	6. 最初と最後の頁 1-403
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kashiwagi, K., & Kobayashi, Y.	4. 巻 1
2. 論文標題 Science in CLIL in a Japanese Upper Secondary School: Focusing on Increasing Procedural Knowledge with a Usage-based Model Perspective	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Journal of the Japan CLIL Pedagogy Association	6. 最初と最後の頁 19-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kashiwagi, K., & Ito, Y.	4. 巻 10 (11)
2. 論文標題 EFL Learners' Grammatical Awareness through Accumulating Formulaic Sequences of Morphological Structure (-ing)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 English Language Teaching	6. 最初と最後の頁 60-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5539/elt.v10n11p60	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kashiwagi, K., Lee, S., & Ito, Y.	4. 巻 -
2. 論文標題 The Effectiveness of Formulaic Sequences on Acquisition of the English Passive Voice: Using Dictogloss Tasks in Form-Focused Instruction	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of Hawaii International Conference on Education	6. 最初と最後の頁 167-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長田恵理 柏木賀津子 山口高嶺	4. 巻 9
2. 論文標題 イタリア・トレント市の小学校CLILの取り組みと教師の抱える問題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國學院大学教育開発推進機構紀要	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柏木賀津子 中田葉月	4. 巻 20
2. 論文標題 音韻認識からはじめる「読むこと」へのゆるやかな5ステップA Gradual Five-Step Process: Shifting from Phonological Awareness to Reading Readiness	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JACET 関西紀要	6. 最初と最後の頁 136-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柏木賀津子 山野有紀 村上加代子 伊藤由紀子 李静香	4. 巻 -
2. 論文標題 小中連携の英語とCLIL-Focus on Form・Literacy Skill を取り入れて- (課題別プロジェクト(招聘))	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 全国英語教育学会島根大会論文集	6. 最初と最後の頁 259-263
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柏木賀津子 山野有紀 村上加代子 伊藤由紀子 李静香 犬塚章夫 安達理恵 チェン敦子	4. 巻 47
2. 論文標題 こころと言葉の発達から見る小学校英語-文のしくみへの気づき・音声から文字へ・CLIL」(課題別研究プロジェクト2年目)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 308-310
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計38件（うち招待講演 17件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 柏木賀津子 古賀真也
2. 発表標題 小学校教員のティーチャートークの質を高める研修ーICTを活用した研修用コンテンツの開発をととしてー
3. 学会等名 小学校英語教育学会埼玉全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柏木賀津子 ダニエル ロイ ピアース
2. 発表標題 フィンランド、セイナヨウキ小学校への「俳句 to the World」オンライン授業
3. 学会等名 四天王寺大学海外教育実践プロジェクト講義
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 サイエンスと小学校英語教育
3. 学会等名 久留米市教育委員会主催公開研究会（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 体育プレルボールと小学校イマージョン教育
3. 学会等名 泉大津市イマージョン教育公開研究会（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 CLIL x SDGsをトピックにしてーグローバル視野を取り入れた大学でのワークショップ実践ー
3. 学会等名 関西英語教育学会（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 中学校・高校英語教育学会におけるパフォーマンス課題討論
3. 学会等名 HARVEST関西英語授業研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 「俳句 to the World」における日本語教育とCLIL指導
3. 学会等名 日本CLIL教育学会（CLIL-ITE教員国際研修部門）於 ベトナム日越大学（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kazuko Kashiwagi Takayuki Shishido
2. 発表標題 The Edu21st scale: Measuring and assessing the 21st century reflective practice and effectiveness of teachers in implementing a cross-curricular approach to teaching in higher education
3. 学会等名 WERA2021:World Education Research Association/Conference Proceedings（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柏木賀津子 山下佳世子 鈴木渉 北野ゆき 中田葉月
2. 発表標題 エビデンスベーストの英語の読み書きー小学校外国語科を支える10回パッケージ
3. 学会等名 小学校英語教育学会埼玉全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古賀直也 柏木賀津子
2. 発表標題 ティーチャートーク
3. 学会等名 小学校英語教育学会埼玉全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Josephine Moate Tea Kangasvieri 柏木賀津子
2. 発表標題 フィンランドの英語教育とCLILー学習者Agencyの視点から
3. 学会等名 日本CLIL教育学会(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 島崎圭亮 柏木賀津子
2. 発表標題 カリキュラムマネジメント
3. 学会等名 大学英語教育学会 JACET全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 フィンランドの教育とTeacher Agencyの高揚を図るCLILの取組
3. 学会等名 関西授業研究会奈良支部勉強会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 初めて取り組むCLILの授業-ZOOM上でやってみよう-
3. 学会等名 CLILとアクティブラーニング研究会 ZOUMM (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 島崎圭介 柏木賀津子
2. 発表標題 理科と英語のコラボレーションで育てるPISA型学力に関する長期研究-中学校におけるカリキュラム・マネジメントから-
3. 学会等名 日本CLIL教育学会 ZOOM
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 教員の英語力アップワークショップ: 英語の教え方と振り返りをとおして-CLILの理論と実践を学ぶ
3. 学会等名 大谷大学科研 教員免許講習 ビデオオンデマンド配信 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 教師のTeacher Talkwo育てるCLILオンライン教材－聞いてかんがえ発話へと繋ぐスキヤフォルディングを－
3. 学会等名 小学校英語教育学会 中部岐阜全国大会 ZOOM
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 島崎圭介 城台祐樹 里見拓也 柏木賀津子
2. 発表標題 中学校CLILオンラインコンテンツ開発－21世紀の仕事を創造しよう
3. 学会等名 日本CLIL教育学会 ZOOM
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古賀真也 柏木賀津子
2. 発表標題 小学校英語教育におけるティーチャートークの研究－意図的で構造化されたインプットを身に付けるための研修用コンテンツ
3. 学会等名 JACET教育問題研究会 言語教育エクスポ ZOOM
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 CLILと文構造の指導－SDGsと食品ロスをトピックに＝
3. 学会等名 令和2年度北海道教育大学小学校英語オンライン講座－小学校外国語のための免許法講習等実施事業（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuko KASHIWAGI
2. 発表標題 Early adolescent learners' noticing structures by accumulating formulaic sequences
3. 学会等名 The 4th International Conference Thinking, Doing, Learning: Usage Based Perspectives on Second Language Learning (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Keisuke SHIMAZAKI Kazuko KASHIWAGI
2. 発表標題 The Effect of Cross-curricular Instruction on Science and English to Raise Key Competencies in a Japanese Junior High School."
3. 学会等名 International Conference of Education in Thailand (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 フィンランドの英語教育とTeacher Agencyの育成
3. 学会等名 大阪教育大学教育フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 経済教育と英語教育の融合の実現をめざすシンポジウム
3. 学会等名 日本経済教育学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 フィンランドとヨーロッパのCLILレポート 教育制度と関連してー
3. 学会等名 日本CLIL教育学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Keisuke SHIMAZAKI, Kazuko KASHIWAGI
2. 発表標題 日本の中学校における教科横断の授業とカリキュラムマネジメント
3. 学会等名 日本CLIL教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kashiwagi, K.
2. 発表標題 How the Use of Drama in CLIL Lessons in EFL Classrooms Affects Pracy: A Comparison of Finnish, Italian and Japanese Pupils
3. 学会等名 International Conference on Quality of Bilinguals (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kashiwagi, K.
2. 発表標題 How UBM Perspectives Excert a Positive Influence on Instruction in a CLIL Classroom: Towards Increasing Students' Procedural Knowledge
3. 学会等名 NERA: Nordic Educational Research Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 CLIL小中部会基調講演
3. 学会等名 日本CLIL教育学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柏木賀津子 山野有紀 村上加代子 伊藤由紀子 李静香 森田琢也 工藤泰三
2. 発表標題 小中高連携の英語とCLIL - 思考力と4技能5領域へのTrack
3. 学会等名 全国英語教育学会京都大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kashiwagi, K.
2. 発表標題 Implemation the Use of Drama Plot in CLIL Lessons Through Overseas Teaching Practice
3. 学会等名 大学英語教育学会仙台大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柏木賀津子 山野有紀 村上加代子 伊藤由紀子 李静香
2. 発表標題 全国英語教育学会 課題フォーラム「小中連携の英語とCLIL - Focus on Form・Literacy Skill を取り入れて」
3. 学会等名 全国英語教育学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kazuko KASHIWAGI Shizuka Lee Ito Yukiko
2. 発表標題 The Effectiveness of Formulaic Sequences on Acquisition of the English Passive Voice: Using Dictogloss Tasks in Form-Focused Instruction
3. 学会等名 Hawaii Internatinoal Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 「小学校学習指導要領改訂を受けて-小学校英語教育の変わるもの・変わらないもの-」
3. 学会等名 日本児童英語教育学会 JASTEC九州支部 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kazuko KASHIWAGI
2. 発表標題 How the use of drama in CLIL lessons in EFL classrooms affects oracy: A comparison of Finnish, Italian and Japanese pupils
3. 学会等名 International Conference on Quality of Bilingual Programs in Higher Education (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 Drama Plot in CLIL
3. 学会等名 日本CLIL教育学会西日本支部研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 小中連携のCLILと音声からの文字指導
3. 学会等名 日本CLIL教育学会小中学校部会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柏木賀津子
2. 発表標題 CLIL - 「梯子」をかけて「思考」を促す言語活動とは-
3. 学会等名 平成29年度全国英語教育学会・小学校英語教育学会第1回合同英語教育セミナー（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計16件

1. 著者名 西田理恵編著 柏木賀津子分筆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大修館	5. 総ページ数 15
3. 書名 第4章 動機づけを仕掛ける教育実践－中学校におけるCLIL実践と動機づけを高める仕掛け『動機づけ研究 にもとづく英語指導』	

1. 著者名 柏木賀津子 伊藤由紀子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館	5. 総ページ数 220
3. 書名 小学校・中学校ではじめて取り組むCLIL授業づくり	

1. 著者名 柏木賀津子 伊藤由紀子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 130
3. 書名 思考プロセスを重視するCLILの英語授業-中学校・高校 CLILの実践 教科の学習内容を深め、英語力を磨く指導法	

1. 著者名 白畑知彦 中川右也 編著 担当頁 pp.193-219)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 27
3. 書名 英語のしくみと教え方 こころ・ことば・学びの理論をもとにして	

1. 著者名 小学校英語教育学会20周年記念誌編集委員会編 担当頁 pp.84-89	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 6
3. 書名 小学校英語教育ハンドブックー理論と実践ー	

1. 著者名 穴戸隆之 (柏木賀津子 伊藤由紀子 編著) 担当頁 pp.42-47	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 6
3. 書名 『バレーボールの動き 体育×英語』 『とっておき！魅せる！英語授業プラン 思考プロセスを重視するCLILの実践』	

1. 著者名 柏木賀津子 伊藤由紀子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 240
3. 書名 小・中学校で取り組むはじめてのCLIL授業づくり	

1. 著者名 柏木賀津子（分筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 127
3. 書名 ジュニアサンシャイン文部科学省検定教科書小学校外国語科6年	

1. 著者名 柏木賀津子（分筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 120
3. 書名 ジュニアサンシャイン文部科学省検定教科書小学校外国語科5年	

1. 著者名 柏木賀津子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 8
3. 書名 小学校外国語科の基本的な考え方	

1. 著者名 柏木賀津子 伊藤由紀子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 『中学校・高等学校 とっておきの魅せる！英語授業プランー思考プロセスを重視するCLILの実践』	5. 総ページ数 170
3. 書名 明治図書	

1. 著者名 柏木賀津子 (編著 分筆 副編集)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 16
3. 書名 『ジュニア サンシャイン』文部科学省検定済教科書 教師用指導書 5・6年	

1. 著者名 柏木賀津子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 4
3. 書名 『小学校英語早わかり実践ガイドブック-新学習指導要領対応-』高学年用-文字の教え方	

1. 著者名 柏木賀津子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 4
3. 書名 『はじめての小学校外国語活動 実践ガイドブック-新学習指導要領対応-』中学年用-文字の教え方	

1. 著者名 柏木賀津子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 25
3. 書名 朝倉日英対照言語学シリーズ『英語教育と言語研究』-第3章 英語教育と文理解	

1. 著者名 柏木賀津子 伊藤由紀子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大修館	5. 総ページ数 70
3. 書名 小中連携の英語教育-CLILハンドブック-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>日本CLIL教育学会（CLIL-ITE教員研修国際研究集会）於フィンランド国セイナヨウキ市教育委員会 ユヴァスキュラ大学 オーボ・アカデミー大学との研究集会 ユバスキュラ市オカラ小中学校 https://www.clil-ite.com/_files/ugd/21cf07_05639c085c8742678fa9844ddd1f78f9.pdf https://www.shitennoji.ac.jp/ibu/guide/department/news/edu-tyusyo/guide-46431.html 日本CLIL教育学会（CLIL-ITE教員研修国際研究集会）於ベトナム国 日越大学 ハノイ工業大学 https://www.clil-ite.com/_files/ugd/21cf07_c31407b7abb147f5b4415868aabb6fdd.pdf</p> <p>Student Agency within Finnish CLIL https://www.j-clil.com/ 柏木賀津子 外国語教育研究室ホームページ https://www.kashiwagi-lab.com/ フィンランド・イタリア海外教育実習成果報告書 https://osaka-kyoiku.ac.jp/_file/tennoji/rengokyousyokudaiigakuin/171216houkokusho.pdf</p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	種村 雅子 (Tanemura Masako) (30263354)	大阪教育大学・教育学部・教授 (14403)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	六戸 隆之 (Shishido Takayuki) (40331962)	東北学院大学・教養学部・教授 (31302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 柏木賀津子（2023.8）Teacher Agencyの高揚を考えるーフィンランドと日本の共同研究（Miriz あべのハルカス33F）イノベーションの起こりやすい職場を創るー日本語フィンランドのDialogic Talkから	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 日本CLIL教育学会（CLILーITE教員研修国際研究集会）於 フィンランド国セイナヨウキ市教育委員会ホール	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 日本CLIL教育学会（CLILーITE教員研修国際研究集会）於ベトナム国日越大学・ハノイ工業大学	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 グローバル時代の教師ーヨーロッパのCLIL教育とデジタル教育プラットフォームの構築	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
フィンランド	セイナヨウキ市教育委員会	ユヴァスキュラ大学	オーボ・アカデミー大学